エリューシブ・イリューシブ

＜THE ELUSIVE ILLUSIVE by BEN DAGGERS＞

はじめに

親愛なる読者の皆様、「THE ELUSIVE ILLUSIVE（とらえどころのない人目を欺くもの）」にようこそ！

多くの皆さんと同じように、私は「MAGICAL EFFECT」というとらえどころのないものを常に追い求めています。よいエフェクトというものは、捕まえるのがとても難しい動物のようなものです。ちょっとした手違いや、少しの急な動作、足で小枝を踏んだかすかな音ででも、それは逃げてしまい二度と姿を現しません。
多くの「狩り」は成果なくむなしく終わります。しかし、幸いなことに例外もあります。以下の頁で皆さんが見るものは、私が何とかして捕まえて、檻に入れて家に持って帰ったものなのです。

皆さんがこの本で読むルーティンやテクニック、エッセイなどは、私独自（PERSONAL）のものです。「私独自」と言っても、よくある「これは単なるカードマジックではありません。私という人間の奥深さを示す哲学的熟考の結果なのです」などという大げさなことを言いたい訳ではありません。これらは単なるカードマジック（そしてコインマジック）です。

しかし、それらは私が考案し、私が演じているという意味で「私独自」のものです。
ルーティンは、私のキャラクター、セリフ、ハンドリングなど私の強みを強調し、弱点をカバーするようにデザインされています。中には、私が何年もかけて思考錯誤し磨きをかけて来た、よく「難しい」と言われるテクニック、例えば、「PERFECT FARO SHUFFLE」、「FALSE DEAL」、「CULL」なども出て来ますが、一方ではまた、基本的なスライツとミスディレクションによって出来るものもあります。

私は自分のトリックなどを文章にする時には、３つの基準を設けています。

１つ目は、それが私が通常演じているものであることです。

私はここ数年にわたり、毎週のようにポンタ・ザ・スミスとタケシ・タニグチとショーをやってきましたが、そこで多くの作品を公式に試すという贅沢な機会を与えてもらいました（訳注：著者は大阪在住です）。私のショーで合格したものが、この本に収められています。

２つ目は、すべてのエフェクトが、プレゼンテーションややり方、効果において目新しく価値のあるものであることです。

ある場合には、まったく新しい方法論的アプローチやハンドリングの改良を行い、またある場合にはドラマチックな観点からプレゼンテーション面を触るだけのこともあります。

３つ目は、皆さんがルーティンをここに書かれた通りにやらなくても、皆さんの応用が利くものであることです。

テクニックにしても、「DROP SHUFFLE」にしても、別にそれをしなくても別なシャフルでも良いのです。ここにあるものは、あなたにその正確なやり方を教えることも役目ではありますが、あなた自身のアイデアを生むための跳躍台という役目もあるのです。ここにあるものはすべて、石のように固まったものではありません。

最後に、私を支えてくれた人たちに感謝したいと思います。この本の表紙には私の名前しか書いてありませんが、もし私が感謝したい人達の名前を書いたらとても表紙のスペースにはおさまらないでしょう。
GUY HOLLINGWORTH や DENIS BEHR、PIT HARTLING などとの交流やその著作は、私にマジックブックというのは単なるトリックの寄せ集めではなく、スライツが食材の代わりをするレシピ本だと教えてくれたのです。

最後に、私の友人であり、先生であり、批評家であり、サポーターでもあるポンタ・ザ・スミス氏に特別な感謝をささげたいと思います。彼の支援、アドバイス、悪口がなければ、この本は出来なかったでしょう。

2021 年２月 大阪にて　　BEN DAGGERS

（訳注１：BEN DAGGERS は英国人ですが、中国を経て現在は日本に住んでいます。英語、ドイツ語、中国語、日本語、スペイン語に堪能であり、ピアニストでもあります）

（訳注２：この本の各トリックの説明には、（EFFECT 効果）の次に（METHOD OVERVIEW やり方のまとめ）というセクションがあります。ハンドリングを数行にまとめたものですが、実はこれだけ読んでも全体像や手順上の細かいニュアンスが分からないとむしろ混乱してしまうことが多いと思います。訳者も、説明全体を読んで初めて、「ああ、こういう事だったのか」と理解することが多かったです。最初のトリック「TRIBUTE」だけは（METHOD OVERVIEW）を訳しておきましたが、読んでも何のことやら分からないと思います。そこで本解説書では、その他の（METHOD OVERVIEW）はあえて省略させていただくことにいたしました。むしろない方が分かり易いと思いますので。よろしくご了解のほど、お願いいたします）

目次

はじめに　— *1*

Tribute：トリビュート　— *4*

Soft Centre：ソフトセンター　— *8*

THINKING LIKE A LAYMAN　— *13*
（エッセイ：一般客のように考えよう）

Triumph for Two：トライアンフ・フォー・トゥー　— *14*

Invisible Sleeves：見えないスリーブ　— *20*

Hands Off ACAAN：ハンズ・オフ・アカーン　— *23*

Ben Daggers’ Drop Shuffle：ドロップ・シャッフル　— *28*

One Track Mind：ワントラックマインド　— *31*

ON THE CLASSIC FORCE　— *36*
（エッセイー「クラシックフォースについて」）

Mirror, Mirror：ミラー・ミラー　— *39*

OPOD：アウトジョグド・プッシュオフ・ダブル　— *44*

Technicolour：テクニカラー　— *47*

RECYCLING PRESENTATIONS　— *53*
（エッセイー「プレゼンテーションのリサイクル」）

Uncommon Sense：アンコモンセンス　— *54*

Illusion of Control：イリュージョン・オブ・コントロール　— *61*

Babel Coins：バベル・コイン　— *64*

OUTRODUCTION （終わりにー要約）　— *68*

Tribute:トリビュート

このルーティンはフラリッシュを単なる「お飾り」ではなく、エフェクト自体の必要部分として組み込んだ一例です。

「ONE-HANDED SHUFFLE」を多くの時間をかけて練習する中で（そして、何回も失敗してカードを床から拾うことを繰り返す中で）、単にエフェクトとエフェクトの間につなぎで見せるのでは報われないと思い、このルーティンを考えたのです。

既に「ONE-HANDED　SHUFFLE」が出来る方には、このルーティンはさほど難しいものではないと思います。そうでない人はこのルーティンを練習のスタートポイントとしてください。

（効果）

あなたは、目隠しをされた状態で片手でカードをシャフルしカットして４A を取り出すことが出来ると宣言します。さらに、今日は好意で４A を客のポーカーハンドにして見せると言います。あなたは言った通りに進めて、デックをシャフルしカットして２つのポーカーハンドを配ります。客の最初の３枚は皆 A であり、事態は予定通りに進行しているように見えます。しかし、あなたは４枚目の A を配るのに失敗します。あなたはその A を驚くようなやり方で現わして、それを使って自分により強力な手、「ロイヤルフラッシュ」を作って見せるのです。

（やり方のまとめ）

―以下省略―

（準備）

４A とスペードの 10 からキングを、デックのトップから次のようにセットします：

―以下省略―

（やり方）

―以下省略―

（補足）

・このエフェクトをなぜ目隠しと片手でやるのかを決めておく必要がありますね。もちろん、ただ目新しさを狙ってやるのも OK ですが、私は何かのストーリーと共に演じたいです。例えばある１つのプレゼンテーションでは、マジック界における私にとっての２人のヒーローの話をしながら進めています。それは RICHARD TURNER と RENE LAVAND です。RICHARD は目が見えないにも関わらず、そして RENE は右腕がなかったにも関わらず、最も偉大なマジシャンのうちの２人と言われるまでになったのです。私がこのエフェクトを演じるのは、タイトル通りに２人を称えるためです（訳注：「TRIBUTE」は、「賛辞」という意味もあります）。

・上述の通り、クライマックスの扱い方がこのトリックの成功に大きく影響します。重要であるのによく見落とされることに、一見マジシャンが失敗したかのように見せる演技についてです。これをオーバーにやり過ぎると観客に見透かされて、次に来るクライマックスの効果が削がれます。そこで私は、「失敗」から「ロイヤルフラッシュの開示」までを速やかに進めることを薦めます。

―以下省略―

（クレジット）

・最初のヒントは、DARWIN ORTIZ の「ONE-HANDED POKER DEAL」（１９９５年）から得ました。そこで使っている「PERFECT ONE-HANDED FARO」を止めて、最後の A のパームと「ロイヤルフラッシュ」のキッカーを加えました。

・VERNON の「TOPPING THE DECK PALM」は、LEWIS GANSON の「FURTHER INNER SECRETS」（１９６１年）にあります。

Soft Centre：ソフトセンター

私はカードを扱うスキルそのもののデモンストレーション、特に大げさなものは好きではありません。あなたが言った通りに客が受け取ってくれればまだ良いですが、悪くすれば客はあなたがギミックカードや何か秘密の方法を使っていると思うでしょう（実際、そういうケースが多いのですが）。ギャンブリングデモンストレーションなどは、マジックの演技としての存在価値はあると思いますが、私は以下の２つの条件が必要だと思います。

１．　そのデモンストレーションのルーティンは、何か追加的な「ひねり」や驚きの要素があること（「TRIBUTE」の例をみてください）。

２．　そのデモンストレーションは、マジックと同じように信じがたいものであること。

このルーティンは、後者の好例です。

（効果）

客がシャフルしたデックから客が１枚のカードを選んでデックの中に入れてしまいますが、あなたはそれをデックのセンターから取り出して見せます。続けて客のカードのメイトカードもセンターから取り出し、最後に客のカードと同色のカードをまとめて取り出して見せます。

（準備）

デックを赤と黒のカードのグループに分けておきます。

―以下省略―

（やり方）

―以下省略―

（補足）

これは即席でも行えます。その場合はメイトカードを使わずに客のカードだけで行い、センターから取り出して見せます。そのカードをデックに戻したら、デック全体を使ってセンターディールのデモンストレーションを行います。まずデックの半分を表向きにして、

―以下省略―

（クレジット）

・デックからセンターディールに見せて実はセカンドディールを使うルーティンは、STEVE MAYHEW の１９９９年の本にある「FREEDOM―THE MAYHEW POKER DEAL」のアイデアであり、DARWIN ORTIZ がそれを発展させた「GOD OF GAMBLERS」を２００２年に発表しています。しかし、そのルーティンは複雑なセットと多くのカウンティングとディーリングが必要であり、私には「そこまでしなくても」と感じられました。私の手順は原案の良いところを残しながら、多すぎると思われる作業を取り除いたものです。

・「THE BLUFF SWIVEL CUT」は、BRENT BRAUN の DVD「DECKS、LIES AND VIDEOTAPE」にあります。

・「PACKET TOSS」の起源はよく分かりません。私はその MOVE はシンペイ・カツラガワによるものだと人から聞いていたのですが、彼本人に私のルーティンを見せた時に「私のものではないと思う」と言われたので、結局分かりませんでした。

―以下省略―

THINKING LIKE A LAYMAN

（エッセイ：一般客のように考えよう―要約）

我々はマジシャンとして「観客の目で自分のマジックを見るべきだ」とよく言われます。しかし、一般客が何を考えているのか理解していない多くのマジシャンがいるのも事実です。

残念ながら、その傾向は近年次第に悪化しているように思います。我々はマジックの世界に永くいると、マジシャン同士では完全に意味の通る話が一般客にも通じると勘違いすることがあります。一般客への演技経験豊富なマジシャンでさえ、しみついた考えを変えるのは難しいのです。

私がよく聞くアドバイスは、自分が「素人」だった時にインパクトの大きかったエフェクトやルーティンについて思い返してみよ、と言うものです。しかし、このアドバイスの難しい所は、マジシャンは「素人」であったことはない、あるいはごく短い時間しかないという事です。マジシャンになるような人は、すぐに初めて見たマジックの魅力に取り込まれてマジックに浸かってしまうことが多いからです。その時点で多かれ少なかれ、また意識的にも無意識でも、自分の時間、エネルギー、お金をマジックにつぎ込もうと決心してしまい、「素人」ではなくなってしまうのです。様々なマジックの知識をベースに常にマジックを考えているマジシャンが、一般客がマジックを見てどう感じているかを理解するのは実際には難しい仕事なのです。

―以下省略―

Triumph for Two:トライアンフ・フォー・トゥー

（効果）

客によってデックの半分が表向きにされて、裏向きの半分にシャフルされます。客とマジシャンに半分ずつ分けて、どちらが早く表・裏をそろえられるかと言います。しかし、競技開始と共にすべてが終わっていることが分かります－客のパケットはまだ表・裏が混在しているのに、マジシャンのパケットはもうそろっているのです。さらに、すぐに客のパケットもすべて裏向きでそろってしまうのです。

（やり方）

このルーティンでは本当に表・裏がミックスされたカードで「TRIUMPH」を行うので、「カードがミックスされている」ことを強調することが大切です。そのために一番良いやり方は、

―以下省略―

（補足）

―以下省略―

（クレジット）

―以下省略―

Invisible Sleeves：見えないスリーブ

私のどちらかというとやややり過ぎの長いカードマジックに比べると、ほとんどのコイントリックは少々迫力に欠けるものに見えます。

この「INVISIBLE SLEEVES」は、私のショーの中にこっそり入り込んだとても数少ないコインマジックの１つであり、「コートハンガー」というとてもありふれた道具を使うことで、とても大きな演技になっています。

（効果）

３枚のコインが「見えない上着」のおかげで、とてもクリーンなやり方で一方の手から他方の手に移動します。

（準備）

コートハンガーが１つと同じコインが４枚必要です（コインは大き目のものが良いです）。またテーブルと、ラッピングに適した高さの椅子が要ります。このトリックは半そでシャツか、長袖をまくり上げて行うことで魔法のレベルとなります。

（やり方）

まずコートハンガーを取り出して見せ、そこからあたかも「見えない上着」を取るジェスチャーをします。それを着たジェスチャーをしたら、ハンガーは下に置きます。上着を着る動作は

―以下省略―

（補足）

まったくやってもやらなくても良いオプションとして３枚のコインを同時に移動させるということも出来ます。

―以下省略―

（クレジット）

このルーティンは、ポンタ・ザ・スミスの「WINGED SILVER」（２００９年）のルーティンをベースにしたものです。私はそこから１枚のコインと１つの段階を取り除いて、始めと終わりのコインの扱い方を変え、プレゼンテーションも補足しました。しかしながら、ポンタは私と会う度に有益な指摘と改善を提案してくれるのであり、それを聞いていると結局のところ最後は彼のルーティンに戻ってしまうのです。嫌な人だ、まったく。

Hands Off ACAAN：ハンズ・オフ・アカーン

このルーティンは、まったく偶然から出来たものです。

私のスペイン語の勉強のために何冊かのスペイン語のマジック本を読み始めました。その中の１冊に、ROBERTO MANSILLA の素晴らしい本「NAYPES」がありました。
その表紙には、ワイングラスに入ったデックの絵が描いてありました。そして、本文の中に「EUREKA」という、デックを半分ずつ背中合わせにした ACAAN のエフェクトがありました。「なんと素晴らしいアイデアだ！」、私は思いました。「古典のワイングラスを使ったカラーチェンジを、ACAAN を完全に「HANDS-OFF（手を触れない）」とするために使うとは！」と感心したのです。

そこで、説明を詳しく読み始めましたが、ワイングラスの説明の部分が出て来ないのです。もう一度がんばってスペイン語を読み返しましたが、やはりワイングラスは出て来ません。それは私が表紙の絵から頭の中で勝手に先走って考えたに過ぎなかったのです。それでも、そのおかげでこのルーティンが頭の中で構成されたのです。

（現象）

１組のデックがワイングラスに入れられて置いてあります。１枚のカードと数字が選ばれたら、マジシャンがほとんどデックに触ることなく、客自身がカードをどけて行きます。すると、選ばれた枚数目から選ばれたカードが出てくるのです。

（準備）

デックがちょうど入るワイングラスが必要です。また、デックはスート毎に A から K まで順番に並べておきます。もしあなたがニューデックを使うならば、下半分２６枚のカードの順番を逆にすれば OK です。

（やり方）

私がこの ACAAN をやる時には、始めに現象を話してしまうことが多いです。やり方がとてもクリーンなので、始めに現象を教えて客がむなしくやり方を追い求めることで、かえって不思議さが増す珍しいケースです。

「私が毎回ショーを行う時に、残念なことに必ず１人、私の演技を楽しく思わない人がいるのです・・・それは私なのです。問題はトリックがどのようにして行われるかをみんな知っているからです。

しかし、次のこのトリックは例外です。私でさえ、どうなっているのか分からないのです。何が起こるか、説明しましょう・・・」

こうして、私は本当にこれからやる ACAAN の現象を観客に話します；

―以下省略―

（クレジット）

・このルーティンの骨格は、ROBERTO MANSILLA のものとほぼ同じですが、彼がこのヴァリエーションを発表するのを許可してくれたことに感謝です。彼の本「NAYPES」（２０１７年）は、有難いことに VANISHING.INC.から英語版が出ていますので、この本が終わったら是非読んでください。

なお、MANSILLA のヴァージョンは、BARRIE RICHARDSON のトリックにヒントを得たものです。それは１９９９年の本「THEATER OF THE MIND」にある、センターで向き合わせたデックのアイデアとメモライズドデックを組み合わせたものでした。

・DR.DALAY の「DELIGHT SWITCH」は最初に、「THE PHOENIX」誌２２０号（１９５１年）に発表されました。

Ben Daggers' Drop Shuffle：ベン・ダガーズのドロップ・シャッフル

私は最近、近年カードマジックの世界では宇宙にある原子の数よりも多いフォールスシャフルがあると読んだことがあります（原注：「THE ELUSIVE ILLUSIVE」という本の８１頁です・・・）。

マジックのその他の MOVE と同様に、フォールスシャフルにも欠点があります。例えば、「ZARROW SHUFFLE」は、観客の注意がデックに集中している時に秘密の動作をしなければなりません。「PUSH-THROUGH SHUFFLE」では、最後のカットが完了するまで両手をデックから離すことが出来ません。「IN-THE-HANDS FALSE SHUFFLE」の多くが絶えず緊張を強いられる状態にあります。

同じように、この「DROP SHUFFLE」も完璧な MOVE ではありません。見た目がやや雑な感じがするので、すべての人に向いているとは言えないかもしれません。またテーブルが必要なので、どこででも練習が出来るというものでもありません。

カードの見た目の混ざり具合も、他のフォールスシャフルのように十分ではないかもしれません。しかしながら、リラックスした雰囲気やごちゃ混ぜな感じ、クリーンな流れは、デックを確かにミックスしたという強い感覚を客に与えます。また、角度的にまったくフリーであり、どんなテーブル面でも出来て、そのうえ易しく出来ます。

「THE DROP SHUFFLE」は１つの MOVE ではなく、既存のいくつかのテクニックを組み合わせて、デックをミックスしたかのような錯覚を与えるものです。ここではまず、基本的な作業を説明した後、さらにこのシャフルをよりディセプティブなものにするための追加的作業を説明します。

―以下省略―

（補足）

１．「THE DROP SHUFFLE」は、メモライズドデックなどのスタックデックとよく合うでしょう。場合によっては表向きでも行えますが、その場合は、

―以下省略―

（クレジット）

・最終的にはとても変わったものとなりましたが、最初のヒントは WOODY ARAGON の「A BOOK IN ENGLISH」（２０１１年）にある「SWINDLE SHUFFLE」から得ました。

・２回目のトップパケットのカットは、ポンタ・ザ・スミスとのセッションの間に現れたアイデアです。

―以下省略―